

「青ちりめん高菜」の多収・省力栽培技術の開発

紀南地方特産タカナの安定生産で農家所得を向上

研究開発の背景

- ◇本県郷土料理「めはりずし」の材料に用いられるタカナは、主に水稻の裏作として東牟婁地域で栽培されてきたが、近年は西牟婁地域でも栽培が増加している。
- ◇東牟婁地域では主に「三池高菜」、西牟婁地域では「青ちりめん高菜」の栽培が盛んであるが、「青ちりめん高菜」の栽培技術は確立されておらず、収量が低いため、増収技術が求められていた。

研究成果の内容

省力多収栽培のマニュアル化

○密植、効率的施肥、マルチ栽培による多収、省力栽培技術を開発

- ・多施肥で収量は増加するが、施肥窒素量45kgで収量と窒素利用率が高い。
- ・黒マルチ敷設で、除草作業が省け、雑草との養分競合を防ぎ、株が大きく育つ。
- ・緩効性肥料を全量基肥施肥することで、無追肥による省力栽培が可能。
- ・株間40cm (3,500~3,700株/10a) の密植栽培で反収が増加。

収量と窒素利用率は施肥量窒素45kg/10aが高い

施肥量 (kg/10a)	*収量 (t/10a)	**施肥窒素 利用率(%)
①窒素30	7.74 b	76.2 a
②窒素45	9.03 a	75.2 a
③窒素60	9.31 a	42.5 b

*収量=3500株/10a×株重

**施肥窒素利用率=各試験区の乾物重×窒素含有率÷窒素施肥量

注) Tukey法において5%水準で異符号間に有意差あり

3.6株/m²、平成26年9月29日定植、12月15日株どり収量調査
於:農業試験場

黒マルチ敷設で収量アップ!

試験区	株重(kg)	収量(t/10a)
黒マルチ 無し	0.82	3.0
黒マルチ 有り	1.89	6.9

注) 平成26年度現地試験 田辺市本宮町

緩効性肥料で追肥なしの省力栽培が可能

試験区	株重(kg)	収量(t/10a)
①CDU	1.98 a	7.26
②IB	2.12 a	7.76
③ロング	2.14 a	7.85
④ユートップ	2.20 a	8.07

注1) Tukey法において有意差なし

注2) ①CDUはCDUタマゴ(12-7.5-1.2)、②IBはIBS562(15-16-12)、

③ロングはエコロング413(14-11-13、70日タイプ)、④ユートップ(18-8-10)

窒素施肥量は45kg/10a(うち20kgを石灰窒素で施用)、マルチ敷設、
基肥全量施肥、株間40cm、3.6株/m²



図1 マルチ現地栽培試験
(平成26年度 田辺市本宮町)

産地の状況

- 上富田町、白浜町の富田川流域を中心に水稻裏作として作付けを推進している。

期待される効果

- ☆除草や追肥の作業が削減でき、安定した多収生産が期待できる。
- ☆中山間地の水稻裏作利用による「青ちりめん高菜」安定生産で農家所得を向上。